いち押し中国語学習場
―「胡同（こどう）」

中田妙葉

もし、あなたが「外国語を使えるようになりたい！」と思うなら、その国の日常の場に足を伸ばしてみよう。きっとそこに流れる雰囲気が、あなたの感覚に忍び込んで、日本では分からない言葉の雰囲気を、なんとなくでも感じることができるだろう。

もし、あなたが中国語を学んだなら、観光地だけでなく、北京の横丁に足を向けてみよう。そこでは粋な中国語を五感で味わうことができるだろう。

一度足を踏み入れてみると

確かに最初、横丁に足を踏み入れるには勇気がいった。北京の庶民の伝統的家屋は「四合院」といい、四方を平屋で囲い、外壁を高くつくる。ゆえに、家々をつなぐ横丁の風景とは、高い壁と門以外は外から何も見えない、というものなのだ。

友人に「おいしい朝鮮冷麺屋がある」と、大学近くの横丁に初めて連れて行かれた時は、両脇にそびえ立つ壁の威圧感に、ある種の怖さを感じながら、おずおずとその後ろを付いていったものである。道幅1mばかりの無表情な狭い路地を、不安な気持ちを抱えながらずうっと奥まで入っていくと、トンネルの出口のように路地が切れた。そして横に伸びる道に歩を進めた。すると、先ほどとは打って変った光景が眼前に飛び込んできた。

さほど広くない路地に、今度は人がガヤガヤとごった返している。生活に欠かせない雑貨や食料品の店、ちょっと立ち寄るに良いレストランなどが軒（のき）を連ねる。更に道の両脇にはリヤカーが所狭しと並び、果物や野菜などの生鮮食料品を量り売りしている。おばさんが眉間に皺（しわ）を寄せながらミカンを指で摘み「本当に新しいの？」と聞き、真っ黒い顔のおじさんが「そりゃぁ。広東から来たばかりだよ！」などと、買い物のお決まり文句が飛び交っている。沸き起こる「生活感」というパワーに、一瞬目眩（めまい）を覚えたほどだった。

「四合院」の造りは独特で、四方を囲った家屋の中央には庭がある。住人はそこに思い思いの木々や草花を植えるので、灰色に延々と続く外壁とは打って変わって、その中庭は緑にあふれ、人々は外敵から守られた壁の中で心安らかに暮らしているのだ。そして、細くのびる横丁は、モンゴル語の「路地」を音訳して「胡同」（フートン）と呼ばれる。

「胡同」の見せる表情

「人が集まる店の品は新鮮でおいしい」。中国人共通の食に対する認識である。私は胡同の美味しさと楽しさを知ってからというもの、買い物や食事はそこに通い、散歩をして楽しんだ。四川料理や朝鮮焼肉は安くてどれを食べても美味しかったし、お茶も新鮮で清清しい香りがした。また胡同では、表通りでは見られない、「北京の人々の日常」という表情に出会うことができた。

例えば、中国語のテキストには、日本語の「こんに

ちは」を「你好」と載せているが、北京人は日常ではつかわない。親しい間柄になると、「吃饭了吗？」（ご飯食べた？）と聞いてくる。それに対して相手は「吃了」（食べたよ）、または「还没呢」（まだだぁ）とだけ答える。聞いているほうは別に、「食べてなければ食べさせてあげよう」と思っているわけでない。ただの挨拶なのだ。また、テキストは「おはよう」を「早上好」と教えるが、実際はもっと簡単にすます。目があうと一言「早！」、相手もすれ違いざまに「早！」と言い放って振り返りもせず去ってゆく。最初その光景を見たときは、余りのぶっきらぼうさに驚いたが、そのうちに、「親しい間柄であれば大抵の事は許される」という、気安さと寛容さを感じるようになった。

また胡同には、ゆったりとした独特な空気が流れている。晩秋の青い空の下、おじいさんが大きな将棋板に差し向かい、通りすがりの野次馬に囲まれている。野次馬は一手一手を好き勝手に批評し、打ち手と一緒に興じている。暖かな日差しの中、歩くのもやっとな程の子供を、叔母さんやおばあさん達があやしている。一体誰の子供なのだろう？と思うくらい皆親しげだ。胡同の「向こう三軒両隣」の雰囲気は、来訪者をもホッとさせるものがある。さすがに冬になると門は締め切られ、無表情な光景となる。灰色の空と人気のない胡同。しかし各家は暖を煉炭でとっているので、胡同にはその匂いが立ち込める。匂いは目に見えなくとも、何故か暖かで穏やかな生活を感じさせた。

進む都市化と消える胡同

いまその居住区は消え、片道4車線の広い立派な道路になった。怖い思いをしながら進んだ細い胡同は、一面に青々とした芝が敷き詰められた公園となった。ここに沢山の人達の喜怒哀楽があったなんて思えないくらい、その地区は整備され美しい景観を見せている。確かに便利になった。とりわけ交通事情は大きく改善された。しかし、その代償として、味わいある昔ながらの人々の生活が消滅している。

それを予測したからだろうか、数年前から「胡同巡り」が観光ツアーとして登場した。人力車に乗って胡同を回り、民家と数箇所の観光地を見学するというものらしい。「らしい」というのは、私は人力車に抵抗があり参加したことがないからなのだが、参加した友人は、「民家が綺麗で、かえって違和感があった」といっていた。観光化するのに整理してしまい、自然な味わいがなくなったのかもしれない。

その言葉の国の生活文化を肌で感じることが、言葉を習得する上で大切なのだが、北京では胡同が正しくその空間だろう。表通りからちょっと入るだけで、人々の素顔を肌で感じることのできる場なのだ。北京は歴史都市だけあって観光地には事欠かないが、中国語を学習したのであれば、そんな空間にも自らの足を向けてみるのは如何だろう。迷路のような胡同をぐるぐると巡るうちに、異文化という魔法が、日常という今まで当たり前のように感じていたものに、異次元にいるような不思議な気分を体験させてくれるに違いない。

WAKABA NAKATA

経済学部中国語担当。
中学の時に1年間台湾で生活する。とても暑かったが何故か楽しく、中国語の音の美しさと料理の美味しさ多様さに惹かれた。今度は本場の地へ、と中国へ赴くが、その文化に驚愕。暫く戸惑っていたものの、理解できない不思議さに惹かれるまま、十数年北京に居てしまった。 目下、中国白話小説の日本文学への影響を思索中。